

へるにあらざれば竹の根もまた小竹根にはあらざるべし然るを或人の説に、皇朝自然生の竹は、すべて篠類にして、大竹は皆後世外國より持來れるが繁衍せしなりといへり、これは魏志倭人傳に其竹篠等桃支といへる文によりて、玄かいへるなるべけれども、それは全く我產物の十が一を、おほよそに西土にて書玄るせし物なれば、或は我海濱諸島上には、多く篠等類の小竹を產するを見て、その一偏に拘はりて、さらに國中に大竹ある事を玄らず、又は信濃加賀越前越後などの雪國には、古より今に至るまで、絶て大竹あることなし、たゞ熊笹須壽竹の類のみにして、出羽及び陸奥なども南部領に至りては、生涯竹をみざる者あるよし、續東遊記にみえたり、これによれば皇朝といへども、竹は暖國の產にして、寒國には絶てなきもの、おそらくは西土の人、かかると傳へ聞て漫にその説をなせしも玄るべからず、

〔古事記雄略〕於是若日下部王令奏天皇、背日幸行之事甚恐、故已直參上而仕奉、是以還上坐於宮之時、行立其山之坂上、歌曰○中夜麻能賀比爾多知邪加由流波毘呂久麻加斯母登爾波伊久美陀氣淤斐○下

〔古事記傳四十二〕伊久美陀氣淤斐は、伊は伊理の理を省けるなり、久美は師説に○賀茂久麻加斯の久麻とひとしくて、葉の繁ければ隠り竹と云を約めて、久美竹と云なりとあり、冠辭考さ體に見ゆ、其説の中に、中略伊を發語なりと云はれたるものいかゞ、發語に伊と云は用言に限れり、此の久美は本は用言なれども、久美竹と云とときは、體言なれば、然るに發語の伊を置きにはなきなり、又思ふに、物の彼と此と一に相交はる意にもあるべし、組と云名も糸を相交へば、伊久美竹は葉の茂くして、彼此相入交り合へるよしなるべし、俗言にも事の彼此と繁ざれば伊久美竹は葉の茂くして、彼此相入交り合へるよしなるべし、俗言にも事の彼此と繁ざれども同言なり、契沖がいくみ竹は、竹の名なりといへるは、たゞ淤斐は生なり○中多斯美陀氣淤斐は、師説に立繁竹生なりとあり、冠辭考さす立は生立るさまを云るにて、万葉一二三丁に、春山跡之美佐備立有などもあり、立榮の立も同じ、契沖がたしみ竹を、竹の名なりと云ふは違へり、さて上の伊久美竹と、此と